

「裁判官がこの椅子にすわっていて、判決を下すだろう。行くがよい！」——経験豊かな裁判官は、こう話したのでございます。

サラディン 何たることだ！ 何たることだ！

ナータン サラディン様、もしあなたさまが、自分こそはこのもっと賢い未来の裁判官だとおぼしめすなら……

サラディン (ナータンのほうへ走り寄ってその手をつかんだまま、この場の終わりまでその手を放さない) この塵にも等しいわしがだと？ 数にもはいらぬこのわしがだと？ ああ、何たることだ！

ナータン どうなさいました、サルタン様？

サラディン ナータン、おお、わしのナータン！——おまえの裁判官が言ったその何千年何万年はまだ経っておらん——わたしには、そういう裁判官の席につく資格はない。——行くがよい！——行くがよい！——ただし、わしの友人にはなってくれよ。

Quelle:

G. E. Resshingu: Kenja Natan. [Übers.:] Hamakawa Sakae. In: Meisakushu. [Hgg.:] Arikawa Kantarō, Hamakawa Sakae, Minamiōji Shinichi yaku. Tōkyō 1972. S. 325 - 329.

ナータン 裁判官はこう申しました。「いますぐにもおま
えたちの父親をここへ連れて来るのでないかぎり、とっ
とと帰ってもらいたい。いったいおまえたちは、わしが
ここにすわっているのは謎解きのためだとも思ってい
るのか？ それとも、いっそ本物の指輪が口を割るまで
待とうというのか？——だが待てよ！ たしかおまえた
ちは、その指輪には、持主を人々に好かれる人間にし、神
および人の目に好ましいものにする不思議な力があると
言ったな。これがキイ・ポイントになるはずだ。偽の指
輪には、とうていそういう力はないだろうからな！——
さてと、おまえたちのうち二人が兄弟じゅうでいちばん
愛しているのは誰だ？——さあ、言え！ 言えぬのだ
な？ おまえたちが持っている指輪は、内に向かって働
くだけで、自分以外の人間には効力がないのか？ おま
えたちは、めいめい、自分だけをいちばん愛しているの
か？——もしそうだとすれば、おまえたちは、三人とも、
詐欺にかかった詐欺師のようなものだ。おまえたちの指
輪は、三つとも偽物だ。本物の指輪は、たぶんなくなっ
てしまったのだろう。おまえたちの父親は、そのことを
隠すために、そのかわりとして、元の指輪の替え玉に三
つ指輪を作らせたのだ」

サラディン すばらしい！ 実にすばらしい！

ナータン 「そこでだ」と裁判官は言葉が続けました。「そ

こでだ、おまえたちが、どうしても判決がほしい、忠告
なんぞはほしくないと言うなら、とっとと帰ってもらお
う！——しかし、忠告でよいと言うのなら、この事件
は、ありのままに受け取るがよい。つまり、おまえたち
は、めいめい父親から指輪をもらったのなら、それぞ
れ、自分の指輪は本物だとしっかり思い込むのだ——お
まえたちの父親は、たった一つしかない指輪の持主が一
家の長になるという家風を、これ以上は続けさせたくな
かったのかもしれないぞ！——そして、確かなのは、父親
がおまえたちを三人とも愛していたこと、まったく同じ
ように愛していたこと、そして、おまえたちのうちの一
人をおまえたちが、ほかの二人の不利になるよう
にはしたくないと思っていたことだ。——これできまっ
た！ おまえたちは、それぞれ、父親の、偏見のない公
正な愛をみならうようにするのだ！ お互いに競争し
て、それぞれの指輪の石が持つ力を發揮するよう努め
がよい。そして、穏やかな心、優しい協調性、善行、熱
烈きわまりない神への帰依などによって、石がその力を
發揮できるような手を貸してやるのだ！ そして、おま
えたちのるか未来の子孫の代になって、それぞれの石の
力があらわれてきたら、何千年何万年さきのことかしら
んが、わしは、そのおまえたちの子孫をもう一度この法
廷に呼び出してやろう。そのときには、わしよりも賢い

た'dきたいと思つてお話し申しあげただけでございます。

サラディン 指輪だと！——わしをからかうではないぞ！
——わしが先ほどあげた三つの宗教は、服装から、食べ物
の飲みものに至るまで、ちゃんと区別があるではない
か！

ナータン ただし、内容の面だけは、区別できないのでござ
います。——なぜと申しますに、三つの宗教の内容
は、書き物によるにせよ口伝によるにせよ、みな、歴史
に基づいておりましょう？——ところが、歴史というも
のは、ひたすら、そのまま鵜呑みにされるほかはないも
のでございましょう？——そうではございませんか？

——ところで、こうして鵜呑みにされてきた歴史の場合、
われわれとして、誰が鵜呑みにしてきた歴史をいちばん
信用するでしょうか？ 自分が所属する民族、自分たち
の先祖、子供のころからわれわれがその愛の証の数々を
見せつけられている人々、われわれを騙したほうがわれ
われのためになる場合以外はけつしてわれわれを騙した
ことのない人々——こういう人々が鵜呑みにしてきた歴
史をいちばん信用するのが当然ではないでしょうか？
私が自分の先祖をいちばん信用いたしますのは、サルタ
ン様が御自分の御先祖をいちばん信用なさると同じで
ございます。私はあなたさまに、私の先祖に同調するた

めにあなたさまの御先祖様を嘘つき呼ばわりしてくださ
いとお頼み申すことはできませんが、その逆も同じで
す。このことは、キリスト教徒たちにも当てはまりま
す。そうではございませんか？——

サラディン (神よ御照覽あれ！ この男の言うとおりだ。
わしには反論できん)

ナータン もう一度、話を先ほどの指輪に戻させていた
きましよう。すでに申しあげましたとおり、三人の息子
は、それぞれほかの二人を訴えまして、めいめい、裁判
官に対し、自分は指輪を直接父親の手からもらったと誓
いました。——そして、事実それに違いございませんで
した！ また、父親は、かねてからいつかはおまえを指
輪の特権の持主にしてやると約束していたとも誓いまし
た。——これまた、それに違ひなかつたのでございま
す。——三人の息子は、それぞれ、「父親が自分に嘘をつ
いたはずはない。これほど自分を愛してくれた父親にそ
ういう疑いがかかるくらいなら、ほかの点ではどんなに
ほめられても当然と思つている兄弟たちではあるけれど
も、むしろこの二人の兄弟が詐欺を働いていると考えた
い、裏切者たちの尻尾はきつとつかんで、必ず復讐して
やる」と断言いたしました。
サラディン で、裁判官はどうした？ そちがその裁判官
にどう言わせるか、楽しみだ。話せ！

しょうか、サルタン様？

サラディン わかるとも。先を続けてくれ！

ナータン そのようにしてこの指輪は、息子から息子へと
伝えられて、最後に、三人の息子を持ったある父親の代
になりましたが、息子たちは、三人とも同じようによく
父親の言うことを聞き、したがって、父親のほうでも、
三人をみな同じように愛さないわけにはゆきませんでし
た。ただ時おり、三人の息子のそれぞれとさして、ほ
かの二人のことを考える余裕がない場合には、いま目の
前にいる息子こそ指輪を継がせるにふさわしいと思われ
たものですから、律義で気の弱い父親は、結局、三人の
息子のそれぞれに指輪をやる約束してしまつたのでご
ざいます。そして、それはそれで収まつておりました。
ところが、いよいよ死ぬというときになって、このお人
好しの父親は、はたと当惑しました。自分の約束を信じ
ている息子たちのうちの二人を裏切らなければならぬか
と思つて心を痛めたのでございます。——さてどうした
ものかと思案した父親は、ある細工師のところへそつと
使いをやり、自分の指輪をかたどつた別の指輪を二つ注
文し、それを元の指輪と同じ——まったく同じように
作ってもらいたい、そのためには費用も労力も惜しむな
と命じました。細工師は、みごとにこの依頼を果たしま
した。できあがつて持つて来られた指輪を見ますと、父

親でさえ元の指輪の区別がつきません。喜び勇んだ父親
は、三人の息子をそれぞれ別に呼んで、それぞれ別に、
祝福とともに約束の指輪を与え——そして息を引き取つ
たのでございます。——聞いていただいておりますで
しょうか、サルタン様？

サラディン (はつとなつてナータンから顔をそむけ) 聞
いているとも、聞いているとも！——そのおまえのお伽
噺、早く終えるがよい。——もうすぐだろうな？

ナータン もう終わります。と申しますのは、これからさ
きの経過は、当然予想されるとおりでございますから。

——父親が死んだとたん、三人の息子たちは、それぞれ
自分の指輪を持つて名乗りをあげ、めいめい、自分が一
家の長だと主張いたしました。お互いに詮索し、言い争
い、裁判に訴えましたが、すべては無駄でした。本物の
指輪は、区別がつかないのでございます。——(サ
ルトンの返事を予期して、しばらく間をおいたあと) そ
れはちょうど、いま私どもが問題にしております本物の
信仰が、区別がつかないのと——ほとんど同じでござい
ます。

サラディン 何だと？ それがわしの質問に対する返事だ
というのか？……

ナータン 区別できないようにと父親がわざわざ作らせた
指輪をあえて区別するだけ自信がないことを、御了解い

[...]

ナータン はるか大昔、東方に一人の男がおりました、その男が、計り知れないほどの値打ちのある指輪を一つ、大事な人からもらって持っておりました。石は蛋白石オパールで、美しい無数の色に輝いておりましたほか、そうと堅く信じてその石を所有する人間を、神および人の目に好ましいものにするという、不思議な力を帯びておりました。したがって、当然のことながら、この東方の男は、その指輪を、一時も指から離さぬばかりか、永久に自分の家のものにしておく手配をいたしました。つまり、男は、その指輪を、息子たちのうちでいちばんかわいいがっていた息子に譲り、あわせて、その息子もまた自分の息子たちのうちのいちばんかわいい息子に遺贈するよう、そして、代々いちばんかわいい息子が、長幼の序列にはかわりなく、もっぱらこの指輪の力によって、一家の長になるよう、定めたのでございます。——おわかりで